

「日本列島における銜猟の考古学的研究」

論文要旨

高橋 健

本論文では、縄文時代以降の日本列島における銚猟について、広い視野での比較による型式学な研究、遺物の観察にもとづいた技術論的な研究、現代の海獣狩猟の民族考古学的な研究の3つのアプローチによる研究を行なった。第1部は現代の海獣狩猟の民族考古学的調査の成果であり、第2部は縄文時代の北海道と東北地方中部・南部、第3部は続縄文時代とそれに並行する弥生・古墳時代、第4部は北海道のオホーツク文化以降の資料を扱っている。

第1部第1章は、道北礼文島における現代のトド猟についての民族考古学的調査の成果である。考古学において欠落しがちな獲物の行動生態に応じた狩猟方法や回収方法の選択などの側面を知るために、現在の狩猟への同行調査と聞き取り調査を行った。1950年代末を境に狩猟の目的は食肉獲得から害獣駆除へと変化し、道具の技術的改良も進んだ。しかしこのような変化にも関わらず、先史時代と同じ構造の銚が現在でも使用されている。銚には獲物を攻撃し殺傷する機能と倒した獲物を回収する機能があるが、このうち殺傷機能が銃によって置き換えられても、優れた回収機能の道具として継続して使用されたと考えられる。

第2部第1章では、北海道の縄文時代の銚頭を12型式に分類して編年を行い、これを形態（尖頭／刃溝）と素材（海獣骨／鹿角）によって整理した。前期前半に道東北部と道央部は形態と素材で対極的な様相を示すが、前期後半には後者に前者の影響がみられるようになる。中期後半にはそれまでの内湾的環境から日本海沿岸の外洋的環境へ進出する。後期には道南の入江型（鹿角製）と道北の船泊型（海獣骨製）という刃溝をもつ銚頭が高度に発達する。晩期になると全道的に鹿角製で尖頭の銚頭が主体となり、前期～後期を通じて北海道の銚頭を特徴付けていた対極性・多様性は解消される。また銚頭と動物遺存体との対比について縄文後期の事例を検討した結果、船泊湾と噴火湾ではアシカ類の特定種の幼若獣に特化した狩猟が行われていたが、銚頭の形態的発達がみられる時期には成獣を含むアシカ類の回遊群に対する狩猟の比重が高かったという結論が導かれた。ただし銚猟の威信獲得活動としての側面が銚頭の形態に反映されていた可能性も考慮する必要がある。

第2部第2章では、第一に燕形銚頭の起源論の研究史についての整理を行った。第二に学史的にも重要な東京大学総合研究博物館所蔵の大洞貝塚出土資料を報告した。晩期中葉における大洞貝塚の燕形銚頭は、尖頭で腹鉤をもつ銚頭が主体で無鉤のものも伴い、少数ではあるが大型で刃溝と背腹鉤をもつ三距の例も現れている。銚の中柄であるシカ中手中足骨製品が存在することから、従来ヤスなしいし刺突具とされてきた中に銚中柄が含まれている可能性を指摘した。第三に、燕形銚頭の起源系統論について論じた。大木冨貝塚出土資料は双距の開窩式銚頭を腹面で合わせたような特異な形態の銚頭であり、「大木型」開窩式銚頭と砲弾形の閉窩式銚頭を繋ぐ可能性がある。宝ヶ峯遺跡出土資料を宝ヶ峯1～3類に分類し、1類・2類が古段階の燕形銚頭（後期中葉～末）であることを指摘して、雄形銚頭祖形説が成立しないことを示した。前期以降東北地方に存在した砲弾形閉窩式銚頭から宝ヶ峯1類・2類が発達し、雄形銚頭の「索孔銚文化圏」において導入された結果、典型的な燕形銚頭が成立したと考えることがで

きる。

第2部第3章では、いわき地方の閉窩式銚頭を寺脇型・真石型・薄磯型に分類し、真石型を頭部形態で細分した。寺脇貝塚と薄磯貝塚における層位的出土状況を再検討し、五段階の変遷過程を提示した。従来主流であった寺脇型を燕形の派生形態とみる編年観とは逆に、寺脇型を後期末～晩期前葉に位置づけ、真石型がこれに置き換わると考えた。仙台湾・三陸地方との関係を見ると、晩期中葉までは索孔／索溝の違いや尾部形態では一貫して地域差がみられるが、頭部形態の変遷過程には対応関係がある。このように技術的共通性を有しながらも独自性を保っていた仙台湾・三陸地方との関係が晩期後葉以降に変化し、燕形銚頭の影響を直接受けることで弥生中期前半に薄磯型が出現したのだろう。

第3部第1章では、続縄文時代の銚頭について論じた。続縄文前半期に発達する多様な銚頭の変遷過程と系統関係を考察するために、まず銚頭の分類基準を整理した。抵抗機能については、繫索を装着する部分より後方に抵抗装置があり、繫索を引く力と銚頭の受ける抵抗によって回転のモーメントが生じる場合を回転式、それ以外を鉤引式とする。抵抗機能と柄装着方法による分類基準を組み合わせ、続縄文時代の銚頭を第1種～第5種に分類した。資料が豊富な道南部の第3種（閉窩回転式）をⅠ～Ⅳ段階に編年し、Ⅱ段階を恵山1式、Ⅳ段階を恵山2式に対比した。第3種は東北地方の燕形銚頭の系統を引くと考えられる。第1種（雄形鉤引式）は続縄文時代初頭には既に広く分布しており、東北地方系統か北方系統の可能性もある。第5種（開窩分離式）は少数ながら続縄文時代初頭には広く分布していたらしい。その出自が論議の対象となってきた第2種（閉窩鉤引式）を頭部形態によって細分すると、尖頭のA群はⅡ段階に、刃装着面をもつB群はⅢ段階に出現する。第1種と第3種からそれぞれ鉤引式と閉窩式という要素を受け継いでまずA群が成立し、後にB群が生じたものであろう。第4種は北海道の伝統的な形態で分布範囲も広く、続縄文後半期には主体となる。

第3部第2章では、縄文系弥生文化や東日本型弥生文化についての議論の中で、また続縄文文化の銚頭との関連をめぐって、近年注目を集めている弥生時代の三浦半島、東海地方、西日本（中国地方と西北九州）の銚頭を対象とした。三浦半島の資料を三浦型と呼称して分類・編年案を示した。三浦半島、いわき地方と北海道における横方向索孔をもつ銚頭の出現過程が多様で一律ではないことから、横方向索孔という規制を伝達し固執するような強硬な伝播プロセスではなく、閉窩回転式という構造が各地で変更を加えながら取り入れられていくような柔軟な受容プロセスを想定した。東日本的な閉窩式銚頭の分布は基本的には関東地方までであり、伊勢湾沿岸は西日本的な様相を示す。西北九州には弥生時代から古代に至る組み合わせ式銚頭の伝統があり、縄文後期にまで遡る可能性がある。山陰地方には上寺地型・福浦型といった独特の銚頭がみられる。青谷上寺地遺跡における編年的考察、福浦海底遺跡資料の使用法の復元、伊木力遺跡資料の組み合わせ方法の復元などを行った。この結果、原の辻遺跡の組み合わせ式銚頭は伊木力遺跡資料を介して上寺地型に繋がると考えることができた。このように西北九州と山陰地方の銚頭は密接な関連をもって変遷していたといえる。

第4部第1章ではトコロチャシ跡遺跡の銚頭について主に製作技術の観点から検討を行った。オホー

ツク文化のⅠ類銚頭にみられる形態の相違は基本的に原材の部位と取り方の違いを反映したものであり、これを直接機能差に結びつけることはできない。アイヌ文化のⅣ類銚頭のソケットが縦横二方向からの穿孔を用いた製作方法によって作られていることを指摘し、トコロチャン技法と仮称した。これによって従来から想定されてきた「窩が深くなり閉じていく」過程を製作技術の面からスムーズに説明することができる。横方向穿孔のみが確認される類トコロチャン技法が広い範囲にみられることは、これが普遍的な技術であったことを示す。また横方向穿孔を用いるという点で共通する技法が、擦文文化やオホーツク文化の銚頭にもみられることを指摘した。

第4部第2章では、モヨロ貝塚出土資料について論じた。10号竪穴出土の銚頭は雄形と雌形Ⅰ～Ⅳ類に分類されるが、主体を占めるのは開窩兼用式のⅠ類（前田A群）であり、藤本d群期の床面からはⅠ類と雄形が出土している。資料の観察に基づいてⅠ類の破損と再生の様相を検討し、従来想定されていた頭部・尾部の削りによる再加工Ⅰに加え、索溝と柄溝を新たに作出する再加工Ⅱの存在を指摘した。Ⅰ類銚頭の長さの分布を比較した結果、再加工Ⅱは道北の香深井A遺跡でも行われていた可能性が高いと考えた。これに対して擦文文化の神恵内村観音洞穴では再加工Ⅰのみが行われていた可能性が高く、再加工Ⅱはオホーツク文化に特徴的な再加工プロセスだったといえる。開窩分離式のⅡ類銚頭（前田B群）は、北海道では藤本e群期の道東部に分布し、閉窩式で抵抗面の幅が狭いⅢ類銚頭（前田C群）には、海獣肋骨製のなどの小型の一群が存在する。

第4部第3章では、香深井A遺跡魚骨層Ⅳから出土した銚頭模造品を手がかりにして、銚頭模造品と小型銚頭について論じた。同資料は頭部に石鏃を装着した状態を一木造で表現しており、形態や構造は前田C群銚頭を模している。同遺跡のC群銚頭と比較するとサイズが著しく小さく、海獣肋骨を素材とする点でも異なっている。同遺跡出土の小型D群銚頭も、サイズが著しく小さいことからやはり実用品ではないと考えた。しかし、モヨロ貝塚出土の海獣肋骨製小型銚頭については、同種の銚頭の主体を占めることと使用の結果生じたと思われる柄槽部や尾部の破損が多いことから、実用品だったと考えた。香深井A資料と類似した模造品は鈴谷貝塚から2点出土している。模造品の用途については、カナダ極北地域における研究を参考にして儀具と玩具の可能性を検討し、決め手を欠いているが海獣狩猟にかかわる儀具であった可能性が高いと考えた。

第4部第4章では補論として、サハリンのオホーツク文化の銚頭の分類、神恵内観音洞穴における銚頭の層位的な変遷、アイヌのキテの分類と出現過程について、それぞれ簡単に論じた。

銚頭という遺物から組み立てた議論と、動物考古学的成果、遺跡の環境、各時代の社会状況などに対する総合的な考察の成果とを重ね合わせていくことが、今後の研究の課題である。

(4059字)